

講演会「東日本大震災の津波被害の教訓」の報告

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）は、我が国観測史上最大のマグニチュード9.0の地震であり、これまでに経験したこともない巨大津波の発生によって多くの人命が失われ、未曾有の地震災害が発生しました。日本地震工学会では、10月21日に「東日本大震災の津波被害の教訓」と題して、講演会を開催しました。

産官学の幅広い分野から145名もの多数の方々に参加いただき、東日本大震災の津波被害に対する関心の高さをうかがわせる講演会でした。講演会の概要は、以下のとおりです。

日時：平成23年10月21日(金) 13:10～18:00

会場：建築会館ホール（東京都港区芝5-26-20）

プログラム：	13:10～13:20	開会挨拶	若松加寿江	（当学会 副会長）
	13:20～14:00	沿岸・陸上での津波	松富英夫	（秋田大学）
	14:00～14:40	防災施設への影響	有川太郎	（港湾空港技術研究所）
	14:40～15:20	水産施設への影響	藤間功司	（防衛大学）
		休憩（10分）		
	15:30～16:10	橋梁への影響	庄司 学	（筑波大学）
	16:10～16:50	建物への影響Ⅰ	奥田泰雄	（建築研究所）
	16:50～17:30	建物への影響Ⅱ	中埜良昭	（東京大学）
	17:30～17:50	質疑・応答		
	17:50～18:00	閉会挨拶	松富英夫	（秋田大学）

（敬称略）

松富先生には、東日本大震災の津波の概要および特徴についてまとめて頂いた。また、現在懸念されている東海・東南海・南海地震による津波被害だけでなく、日本海側でも津波被害が懸念されることをご指摘頂いた。有川先生には、東日本大震災での防波堤、防潮堤の被害事例を紹介して頂くとともに、これまでに行われた実験結果に基づいて被害発生メカニズムを説明して頂き、今後の対策、設計方針についての提案をご説明頂いた。藤間先生には、水産施設への影響として、1983年日本海中部地震、1960年チリ地震との比較を行いながら、漁船被害、養殖施設の被害についてご説明頂き、今後の対策についてご説明頂いた。庄司先生には、東日本大震災での道路橋の津波被害の概要についてご説明頂くとともに、浸水高さや道路橋の被害率との関係や、これまでの実験結果に基づいて橋桁に作用する砕波段波の流体力の評価についてご講演頂いた。奥田先生には、建物への影響として、現地調査に基づいて建物構造別の被害の特徴、被害発生要因について詳細にご説明頂くとともに、建築基準整備促進事業の今後の取り組みについてご紹介頂いた。最後に、中埜先生には、津波避難ビル等のガイドラインで参照されている設計用津波外力評価式との整合性など、2004年スマトラ島沖地震と東日本大震災との比較を行いながらご説明頂いた。質疑・応答時間では、会場から数多くの質問があり、特に、建築、土木構造物に対する今後の設計方針に対する質問が数多く寄せられた。



写真1 開会挨拶の様子



写真2 会場の様子



写真3 沿岸・陸上での津波(松富先生)



写真4 防災施設への影響(有川先生)



写真5 水産施設への影響(藤間先生)

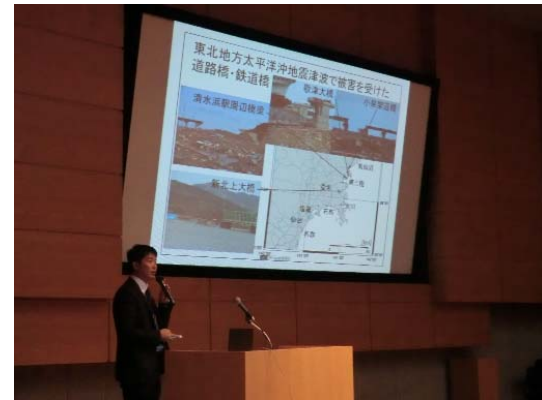


写真6 橋梁への影響(庄司先生)



写真7 建物への影響I(奥田先生)



写真8 建物への影響II(中埜先生)

(文責：事業企画委員会 森井雄史 清水建設)